

実務家教員による情報提供が教職理解に及ぼす影響 —特別活動論の実践を通して—

迫 田 孝 志 [鹿児島大学教育学系 (教職大学院)]

Effects on teacher understanding of information provided by an instructor:

Through practices of the theory of special activities

SAKODA Takashi

キーワード：実務家教員、教職課程、教職理解、キャリア形成、特別活動

1. 目的

教員養成における実務家教員は、教職大学院が制度化される中で教職大学院の教員組織の4割以上の人員が必要とされ、その重要性が認識されてきている。しかしながら、我が国の教員養成の中心は、学部段階での教職課程が担っているのが現状であり、教員養成における実務家教員の必要性が求められるのであれば、学部段階での教職課程における実務家教員の役割やその効果などについて検討する必要があると考える。

筆者は、平成30年度前期に教育学部以外の学部で教職を希望している学生を対象とする「特別活動論」（以下他学部生向け「特別活動論」と表記）を集中講義として担当することになった。本稿では、実務家教員がその特性を活かし、具体的な実践例や学校教育に関する情報を積極的に提供することが、受講者の教職理解にどのような影響を与えるのか検討することを目的とする。

2. 実務家教員の役割

教職大学院における実務家教員については、「教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議」（2013）において「学校現場での最新・多彩な経験を有し、優れた教育実践を行ってきた者が求められており、教育委員会との人事交流や校長等経験者や教育行政の経験者を期限を定めて採用する等により一定期間で替わっていくことが望ましい。また、実務経験と研究能力をあわせ持ち、学校現場全体を客観的、理論的に見通すことができる力を有する実務家教員を、積極的に採用、育成していくことが必要である。」とされており、その重要性が示されている。

安藤（2014）は、平成18年中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度のあり方について」を引用して「実務家教員は、理論と実践の架橋を体現する者であるという前提に立ち、①事例や事例知識等をコーディネートする、②理論と実践の融合を図るための研究的省察を行い、リードするという二つの役割がある。実務家教員は、単に実践経験から来る実務の経験知や識見を有しているだけではなく、知見を理論化し一般化でき、学校現場の状況を重視し、実践的内容を意識した教員

養成教育を展開する中で、実際の指導や教育の場面に応用できる研究成果を創り上げ、学校を巡る課題解決に資する教育を担うところにその役割がある。」と述べ、教職大学院の実務家教員に極めて高い資質が求められることを強調している。

一方、徳永（2014）は「学部段階の教員養成に関しては実務家教員という制度はありません。学部教育の中で、様々なバックグラウンド、経験を持っている教員をカリキュラムポリシーに沿ってどう活かしていくのかという話なので、そこでは学部教育を担当する教員としての資質が求められます。」と述べ、学部段階においては、学校教育の実務家教員に限定せず、幅広い人材活用の必要性を説いている。

また、実務家教員として鹿児島大学に勤務した菊永（2014）は、教職大学院に限定しない形で大学に勤める実務家教員の前提条件として、「教員養成の高度化に向けた授業カリキュラム開発の力を持つこと」、「児童生徒と日々関わり合い、子どもの発達や学校生活上の心理状態など実践と理論を行き交わせながら課題解決に向けて研究・実践を繰り返すという現場の感覚を身につけていること」、「教職に関わる学問や理論を理解し、実践的事例と結びつけたり学校現場の校務や分掌等に分類・整理して学生に説明したりできる力」の3点を挙げ、教員養成の高度化に向けて実務家教員の果たす役割が大きいことを示している。

実務家教員は、現時点では専門職大学院においてのみ規定されていることであり、大学の教職課程では実務家教員という制度はないのが実態である。しかし、平成27年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」では、教員の資質向上を図るために養成・採用・研修の一体的改革の必要性が求められ、教職課程担当教員の資質能力の向上のためには、「教育委員会とも連携して学校現場に携わる教員等を教職大学院をはじめとする大学の教職課程の教員として確保する取組も一層推進すべきである」と示されている。学校現場に携わる実務経験者の経験や実践的研究の成果等の活用方法は教職課程を設置する各大学で判断されるべきものであるが、平成30年度前期において筆者自身が担当した他学部生向け「特別活動論」の実践を通して、受講者の教職理解に実務家教員の情報提供がどのような影響を及ぼしたのか分析することは、学部段階の教職課程における実務家教員の役割を確認する上でも意義があると考えられる。

3. 「特別活動論」授業計画

本科目では、特別活動についての理解を深めるために文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編」を基本テキストとし、特別活動が我が国の学校教育に位置付けられてきた経緯及び現在の学校教育の中で特別活動が果たす役割、特別活動の目標と内容などについて具体的な実践例を通して現状と課題などを整理することが大切であると考えた。

平成29年告示中学校学習指導要領特別活動の目標も改訂の趣旨に即して、①多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする、②集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意

形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする、③自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養うという3点に改められた。

そこで、本科目の授業実施に当たっては、特別活動の目標や内容について構成的グループエンカウンター活動やグループ討議などを設定して仲間づくりや他者との協働、合意形成などを体験的に学べるよう工夫した。また、筆者の過去の実践例の紹介や受講者の経験を想起させた場合も新学習指導要領の目標や内容と関連づけるようにした。表1は、平成30年度前期に集中講義として実施した他学部生向け「特別活動論」の目標及び15回の授業計画であり、表中の(*)は、参考資料として別途配布した資料を示している。プレゼンテーション資料や他参考資料、ワークシート、予習・復習等の記録はファイリングして、特別活動に関する学習の充実を図ることができるようにした。

表1 平成30年度前期他学部生向け「特別活動論」授業計画

目 標	1 中学校学習指導要領の特別活動についてその意義、目標、内容について理解する。 2 グループ活動を通して話し合いや合意形成の仕方を身に付けることができる。 3 教職を視野に入れたキャリア形成を図ることができる。
計 画	第1回 オリエンテーション（事前評価、仲間づくり、学習計画・学習方法の確認） 第2回 学習指導要領の変遷について 第3回 学習指導要領改訂の経緯及び基本方針（*文部科学省「学習指導要領改訂の経過」 *新聞記事「部活動運用指針案」紹介） 第4回 特別活動の目標（*栃木県教育委員会 HP「学業指導」紹介） 第5回 総括（1）振り返りと小レポート 第6回 学級活動（1） 第7回 学級活動（2）（*文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」紹介） 第8回 学級活動（3）（*小学校の学級活動実践例紹介） 第9回 生徒会活動（*中学校の生徒会活動実践例紹介） 第10回 総括（2）振り返りと小レポート 第11回 学校行事（*中学校の学校行事実践例紹介） 第12回 指導計画の作成と内容の取扱い（*新聞記事「いじめ認知件数」紹介） 第13回 学級経営と特別活動（*学級経営案・担任業務年間チェックリスト等紹介） 第14回 評価（小論文・ポートフォリオ点検） 第15回 総括（3）振り返りと事後評価

4. 実務家教員としての授業の工夫

4.1 実務家教員の実態

筆者は、私立高等学校、公立小学校・中学校の教諭、市教委・教育事務所・県総合教育センター

の指導主事、研究主事等、公立中学校校長の実務経験を有している。また、現職派遣として鹿児島大学大学院教育学研究科で長期研修を行い、教育心理学の考え方を教科指導、生徒指導、学級経営、学校経営に活かす努力を行ってきた。特別活動に関しては、小学校2校で児童会運営に携わるとともに地区研究指定を受けた学級活動の実践研究に4年間取り組んだ経験もある。構成的グループエンカウンターについては、県総合教育センター時代に教育相談や生徒指導に関する研修講座、校内研修等での指導経験を有している。

また、3年間の附属教育実践総合センター勤務時には、実践的科目である教育学部1年時の「教職基礎研究」、2年時の「学校環境観察実習」、2・3年生対象「教員養成基礎講座Ⅰ・Ⅱ」、教職実践研究Ⅰ・Ⅱ、4年時の「教職実践演習」、他学部生対象「生徒・進路指導論」などの担当及び協力をした。「生徒・進路指導論」以外は、複数教員によるオムニバスまたはティーム・ティーチング方式であり、単独担当は「生徒・進路指導論」以来、今回の「特別活動論」が2回目である。

実務家教員からの情報としては、小学校教員に正式採用になるまで時間を要した筆者自身の教員としてのキャリア形成のプロセス、自身の教育実践、実務家教員の感覚で選択した授業内容に関連する教育時事や補助資料等を積極的に提供することが重要であると考えた。

4.2 受講者相互の関係づくり

特別活動は、これまでも「なすことによって学ぶ」という経験を重視する方法論をとってきたこと、学級活動や生徒会活動などにおいて仲間づくりを促進する活動を取り入れていることなどの特徴があるため、受講者自身にも構成的グループエンカウンター的活動を通して、一緒に学習していく仲間であるという意識を高める工夫をした。54名の受講者の所属が5学部13学科、学年も2～4年生という多様性のある集団であったため、第1回目はもとより第2回目以降もペア及びグループでの活動を必要に応じて取り入れるとともに、活動後のシェアリングを通して自己開示、相互理解を深めることができるよう配慮した。

4.3 グループ討議

特別活動の目標に即した活動を取り入れるとともに、「主体的・対話的で深い学び」を志向した授業を目指して、習得した知識を活用するグループ討議を積極的に設定した。グループ討議の主な話題としては、第3回「スポーツ庁の有識者会議が示した適切な運動部活動の運用に向けた指針案に関する新聞記事を見て考えたこと」、第4回「特別活動と教科、道徳、総合的な学習の時間、生徒指導、学級経営などがうまく関連するようになるにはどのような工夫が必要か」、第8回「小学校学級活動実践例から学ぶこと、中学校・高等学校で活かせること」、第9回「生徒会活動として行ってきたこと」、第11回「学校行事として行ってきたこと」、第12回「いじめ認知件数に関する新聞記事を見て考えたこと」、第13回「年間準備リストを見て学級担任として行うべきこと」などである。

4.4 振り返りカードの活用

「学習に対する自己評価」、「学習を通して感じたこと・学んだこと・疑問など」、「担当者のコメント」を記入できる振り返りカードを活用して、毎回の終末段階で学習の振り返りを実施した。集中講義（1日5時間×3日間）であったため、受講者の学びのチェックは短時間で行わざるを得な

かったが、受講者の学びや理解の状況、疑問などをできる限り把握して、次の時間に紹介したり、補足説明を行ったりするように努力した。図1はその一部を紹介したものである。

() 学部 () 学科 () 年 氏名 ()

授業日・内容・自己評価	学習を通して感じたこと、学んだこと、疑問など	担当者コメント
6月9日土曜日 3限 第8回 学級活動(3) 自己評価(3)	学級活動の内容や指導法は、割と担任の裁量によるところが大きいという点で感心した。学校、学級の規模や各児童、生徒の特性をよくとらえて、それを活かせる指導の構築が	担任の役割が大きいこと、求められることがわかった。
6月9日土曜日 4限 第9回 生徒会活動 自己評価(3)	生徒会活動は、主に異年齢の生徒らが協力して学校や地域に対して自発的に貢献することが目的であるとわかった。私は中学生のときに生徒会幹事部長をしたが、自分たちの提案を先生方に認めてもらう過程で色々なことを学んだことを思い出した。	がんばって頑張った。
6月9日土曜日 5限 第10回 総括(2) 振り返り小レポート 自己評価(3)	学級活動は課題解決、合意形成、生徒会活動は、さらにそれを異年齢の人と行う、というところに意義があることがわかった。自分のかつての取り組みを振り返ったこと、その時に学んだことを、今、新たに気づくことができた。	よ、学びが豊かになった。

図1 振り返りカード例

5. 実務家教員の情報提供の効果の検討

今回の特別活動論の授業実践においては、事前評価と事後評価、授業理解に関するアンケートなども行っているが、本稿では、第1回オリエンテーションにおける人間関係づくり後の振り返りカード感想、第8回小学校学級活動事例を用いたグループ討論後の振り返りカード感想、第15回小論文における受講者自身のキャリア形成に関する記述等から実務家教員の情報提供が受講者の特別活動の内容理解及び教職理解にどのような影響を与えているか検討を加えたい。

5.1 第1回オリエンテーションにおける人間関係づくり

第1回オリエンテーションでは、本科目の目標や授業計画、授業の進め方などについて理解を深めるために、最初に受講者相互の仲間づくりを行った。表2は、振り返りカードの主な記述例と記述の観点を整理したものである。

①～⑥の例に示されるように、講義計画や講義の進め方、評価方法などの理解に加えて、構成的グループエンカウンター的活動によって、一緒に学んでいく集団として互いを認識し、教室の雰囲気も明るい雰囲気になっていったことを実感し、その手法を活用したいとの思いを強めたようである。さらに、②⑥のように教員採用試験に関する情報として鹿児島県の試験倍率や試験内容、他県における受験年齢引き上げの情報などについてもしっかりと受け止めた学生が数名いた。教員の養成・採用・研修の一体的改革が求められている現状を踏まえ、学生の教員としてのキャリア形成を図るためにも教員採用に関する情報を収集し、積極的に提供することは重要であると考えられる。

表2 第1回授業の振り返りカード記述内容例

学習を通して感じたこと・学んだこと・疑問など	記述の観点
①3週間の講義計画と目的をよく理解できた。成績は良いにこしたことはないのですが、しっかり取り組んでいきたいと思う。特に普段プリントの整理があまり上手ではないので、今回のポートフォリオ評価を意識して丁寧にまとめていきたい。最初のグループエンカウンターは楽しかった。1日5コマってなかなか辛いなと思っていたが、こういう活動が入るだけで、空気もよくなるし、集中力も上がるなと感じた。	○講義の計画や目的の理解 ○ポートフォリオの意識 ○構成的グループエンカウンターのよさ
②この授業の意義や評価についても学んだが、それ以上に初対面の人とのアイスブレイキングのやり方、楽しみ方を学べた。また、鹿児島県の教員採用の現状についても知れた。	○講義の意義・評価の理解 ○アイスブレイクのよさ ○教員採用試験の知識
③今後の授業の進め方や評価の仕方はしっかりと理解できた。オリエンテーションとしてバースデイラインを作ったり、じゃんけんや他者紹介をしたりしましたが、とても参考になりました。今までは他人という認識がとても強かったのですが、実際に話してみると学部が同じであったり、出身が同じであったりして、共通点が見られておもしろいなと感じました。また、教室全体の雰囲気も明るくなったと感じました。	○講義の計画や評価の理解 ○構成的グループエンカウンター
④グループエンカウンターをして、初対面でも話す内容、話題が決まっていれば親しく話せるものだなと感じた。教師として生徒とコミュニケーションを取ることは簡単だと思って、人と接していきたいと思った。教職を視野に入れたキャリア形成を具体的に図りたい。	○構成的グループエンカウンター ○教職を視野に入れたキャリア形成
⑤誕生日ごとに丸く円を作った時、これが特別活動なのだなと思った。全く知らない人たちとも話す機会を設けるのも教師の役目になると学んだ。私は特別活動論の授業を受けることで、教職に関わるだけでなくこれから社会に出て行く中で、人とのコミュニケーションをとるための重要なものになると感じた。	○コミュニケーションの重要性
⑥ただ講義を受けているだけではなく、絶対に関わることがなかった人と同じ誕生日だと知れたり、サークルの話ができたりして緊張したけれどとても楽しかった。50才でも教員になれるのはいいなと思う。それまで社会で学んだことを活かせるので20才で教員になるのとは違う視点を持つてそう。	○構成的グループエンカウンター ○教員採用試験の知識

5.2 第8回小学校学級活動事例を用いたグループ討議

表3は、第8回学級活動に関する学習時に筆者の小学校教諭時代の学級活動実践例「小学6年生：議題『卒業文集を作ろう』」（迫田，1995）を参考資料としてグループ討議を行った後の振り返りカードの記述例である。

本事例の小規模小学校は、特別活動の地区研究指定を受け、「子供一人一人が、自ら気づき・考え・実行する学級活動の指導はどうあればよいか」を研究テーマに、児童が自主的・実践的に活動する学級活動の実践に取り組んでいた。また、例年6年生は、卒業文集や卒業アルバムづくり、竹文字制作などを児童自らの手で計画的に行っていた。加えて、12月から2月にかけて学習発表会、郷土カルタ大会、たこ揚げ大会、クラブ活動発表会などを児童会のリーダーとして運営しており、多くの時間と労力を要する卒業文集づくりについては早めの提案が必要になることから、12月初旬の学

級活動で話し合いを行っている。そのために3週間前の11月中旬には第1回の計画委員会で議題選定を行い、1週間前には第2回計画委員会で話し合いの柱を決めて事前に考えをまとめてくるよう連絡をして当日の学級会の運営に臨み、司会経験の少なかった司会者を他の計画委員がサポートしながら話し合いを進めたことを紹介した実践例である。

表3 第8回授業の振り返りカード記述内容例

学習を通して感じたこと・学んだこと・疑問など	記述の観点
①学級活動では何を議題として話し合うのか、また話し合いをする時期が大切なんだと学びました。小学生でも結構レベルの高い話し合いができるのだということに気づき「小学生だから」という理由で先生がなんでもかんでも指導誘導すべきではないんですね。適切な助言が出来る先生になりたいと思いました。	○議題選定 ○話し合いの時期 ○教師の適切な助言
②学級活動での先生の役割や助言のタイミングなど今となってはあまり思い出せなかったのですが、講義を聴いているうちに思い出せてきて、今になって先生がどう児童に考えさせたかったのかが理解できて、とても勉強になった。中でも資料にあった計画やどれだけ深く行事というものを考えているのかが分かり、先生の気持ちが理解できた。	○教師の役割・助言 ○他の行事との関連 ○自己の経験の振り返りと当時の担任の思いの理解
③今回は小学校の学級活動の実践例を見て学んだ。実際にこのような物を見るのは初めてだったので、新鮮だった。自分はこういった活動は苦手でもいつも流されるままでいいかなと思っていた。しかし、先生たちからはしっかりと意識のうすい所や出来ていない所の対応策、これからの行事との兼ね合い等しっかりと作られていて驚いた。自分もこのような物が作れるのか不安になった。	○実践事例への新鮮な驚き ○他の行事等の関連 ○教職への不安
④具体的な活動例を見て、意見を出し合う活動がとても有意義で楽しかった。目のつけ所が似ている所、違う所が多くあって、こうやって話し合い活動について話し合っているのがなんかおもしろくも思えた。後半少し集中力が切れてしまったので、次またしっかり集中したい。	○グループ討議の意義 ○学習の取組の反省
⑤実践例を見ることでより具体的に留意事項などについて理解することができた。また、自分が疑問に思わなかった(気づかなかった)ことを他の人が質問して、回答を聞くことで、細かい部分もしっかりと考えられて行われているんだと感じた。これを踏まえて自分がどう生かすかも考えていきたい。	○グループ討議の意義 ○理解の深化
⑥小学6年生の学級活動としての卒業文集制作の実践例では、教員は生徒の自主性を発揮させるためにあえて時間を割いて活動の進め方を話し合い活動の中で意思決定させつつ、事前に折に触れて卒業文集制作時の状況を伝えたり、話し合い活動時に円滑な進行のための助言を与えるなどの工夫を行うことで予定通り制作を完了させた。学級活動においては生徒の自主的実践と時間調節その折り合いをつけることが重要であると感じた。	○教師の事前指導 ○話し合いでの助言 ○自主的実践と時間調節の折り合い

グループ討議を始める前に、受講者それぞれが一人で実践例を読み、疑問に思ったこと、詳しく聞きたいと思ったことなどを分析してワークシートに記入する活動を設定した。グループ討議では筆者に質問したいこと、中学校、高等学校でも活かせることは何かなどについて話し合う活動を設定し、熱心な討議が行われ、筆者への質問も多数寄せられた。質問として多かったのは、「児童の自主性を育てるために教師はいつ、どのように指導や助言を行うべきか」や「なぜ、卒業文集や卒業アルバムなどを児童が手づくりしなければならなかったのか」、「限られた時間の中で見通しを持っ

て話し合ったり、実践したりするために教師はどのような手立てを行うべきか」などであった。

また、「司会に不慣れな児童を当てるより、司会が上手な児童にさせる方がうまく話し合いを進められるのではないか」と言った質問もあった。寄せられた質問は、すべて学級活動や特別活動の本質に関わることであり、学級担任であった当時の筆者自身の配慮や願いなどを丁寧に回答した。

表3の振り返りカード①②③の「学級活動における議題選定と時期、他の行事等との関連」や①②⑥の「児童の自主性を育てるための教師の指導やアドバイスとそのタイミング」といった学級活動実施上の留意事項、④⑤の「グループ討議の意義や質疑応答への肯定的な感想」等の授業方法への感想などの記述例から、実務家教員自身の実践例紹介とグループ討議・質疑応答などを通して、受講者は学級活動の具体的な内容や意義について理解することができたと思われる。さらに、1時間の学級活動を実施するために各教科や道徳、児童会活動や学校行事など学校の年間スケジュールとの関連を意識しつつ、児童の自主的・実践的な活動を促すために授業者が様々な配慮を行っていることに気づくことができたのではないかと考える。

5.3 受講者の教職理解、キャリア形成への影響

表4は、第14回小論文の問4として設定した「本講義を通して自身のキャリア形成に影響があったこと」の記述例である。受講者の受講動機は、「資格として教員免許を取得し、卒業後は会社員や公務員になりたい」、「大学卒業後すぐに教師になりたい」、「大学院修了後や社会人経験を経た後に教師になりたい」など様々であったが、「特別活動論」を受講して感じたことが率直に記述されている。記述例①③⑥⑦から専門教科以外の特別活動、学級経営の重要性の理解、①③④⑦から教職への動機づけの高まり、⑥から教職の魅力、⑤から実務家教員の提供する情報の効果など受講者のキャリア形成に少なからず影響があったことが示されている。また、②から筆者自身の個性に言及している内容もあり、提供される実践例や学校教育に関連する情報だけでなく、授業者の声や表情、授業への取り組み姿勢なども含めて実務家教員の情報を受け止めていた受講者もいたことが分かる。

一部の受講者の感想や記述をもって一般化することは控えるべきであるが、受講者は、特別活動の意義、目標、内容の理解に加え、人間関係づくりや話し合い活動などのグループ活動を通して、教職の魅力とやりがい、教師の仕事量とその責任の重さなどについても考え、受講者自身のキャリアについても見つめ直す契機となったのではないかと考える。

これらのことは、実務家教員から教員志望者へのメッセージをもとに教員の職務の実際について報告している関屋ら(2015)が、「これまでの教育を『受けた』経験をもとに自らの教師のあり方を模索するだけでは、児童・生徒の立場から『見えていた』部分に限定されたものになりがちである。実務家教員が実務の中で得た様々な経験を、これからの教育を担っていく存在である学生に伝えていくこと、このことの意味は、一層重要性を増しているといえるだろう。」と指摘しているように、教育実習以外に教育現場での実務体験が少ない教職課程を履修している学生に対して、実務家教員が自身の実務を通して得た経験や実務家教員の視点で整理した情報を積極的に提供していくことが教職に対する理解を深めていくことにつながると考える。

表4 講義を通して自身のキャリア形成に影響があったこと

講義を通して自身のキャリア形成に影響があったこと	記述の観点
<p>①自分は先々教師になるつもりだったので、授業を受けた前後での気持ちは変わらなかった。しかし、理学部ということもあり、今までは自分が受け持つ教科である物理をどうやって分かり易く生徒に教えるかということばかり考えていた。だけど、教師になったら、当然学級担任を持つこともあるので、物理のことばかり考えている訳にはいかず、学級経営や特別活動のあり方についても考える必要があるということが分かった。だから今後は、自分の担当する科目のことだけではなく、どうやったらよりよい学級をつくれるのか、どういう活動が生徒のためになるのかということを考えながら教師になるための勉強を進めていきたいと思った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○教科の専門性 ○学級経営，特別活動の重要性 ○教職への動機づけ
<p>②小・中・高・大と授業を受けてきて、年がたつに従い教員のテンションが落ちついている気がしていた。先生は主に小・中学校の教員であったと知って、また授業を受けて普通の大学の先生より笑顔や声のトーンが高く、小・中学生になった気分だった。そして、何より先生が授業を楽しんでいる感じがした。私は高校の教師を目指すのが、先生のように授業を楽しみ、笑顔の多い明るい先生になりたいと思いました。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○実務家教員の個性 ○目指す教師像
<p>③この授業を通して、特別活動とはどのような活動のことなのか、また、特別活動が何を狙っているのか理解することができました。教師の仕事は膨大でその種類は多岐にわたり、大変な仕事であるということは明らかではありますが、自分は改めて教師になりたいと思いました。自分が理想とする教師像を探していくとともに、教職という仕事や教科の勉強についてさらに学習を進めていきたいです。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○特別活動の理解 ○教職への動機づけ
<p>④私は本講義を通して教科指導以外の学校教育の意義とその重要性を学び、改めて教員の仕事は大変多いことを認識した。しかし、一方でこれからの社会に対応できる人材を育成することは社会にとって不可欠であり、大変意義が大きくしたがってやりがいも大きいものと思った。私は現在大学院への進学を予定しているが、大学院の課程を終えた後でそこで得た成果を社会に還元する方法として、教員として子供たちの人間形成に携わりながら知識も伝達していくことも視野に入れるようになった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○教師の仕事 ○進路の選択肢
<p>⑤本講義の学習を進める中で、私自身のキャリア形成に影響を与えたことは、学級活動実践例と最後の年間準備チェックリストを見たことである。直接的な講義内容ではなく、補足資料のような位置づけなのかもしれないが、聞いていて大変そう難しそうと思うよりも、実際に資料を見た方がどのような声かけが必要なのかやるべき事がどのくらい多いのかということが視覚的に分かり、改めて教師になるのも、なってからも大変なのだということを知ることができた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○補助資料の効果 ○教師の大変さ
<p>⑥本講義の学習を進める中で教員という職業に興味を持つようになった。私は正直、教師になりたいから教職の講義を受けているのではなく、資格がほしいので講義を受けていた。しかし、この講義を通して教科ではない特別活動を学び、私が今まで受けていた教育に多くの願いが込められていたことを知った。講義の中で、先生という職業の現状も知り、大変なことも多いことが分かったが、子供たちの成長の手助けができる職業に魅力を感じた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○資格取得の受講動機 ○教職の魅力
<p>⑦この講義を通して特別活動の役割やそこに対する教師のあり方について深く考える事が出来た。講義の前までは特別活動と言われても何をしてどんな役割があるのか理解できていなかった。しかし、講義を通して特別活動は、生徒の「生きる力」や「確かな学力」を身につけるのに大きな役割を果たしており、そこに関わる教師の存在がとても重要であることを認識できた。この特別活動を通して教師の役割や意義を深く認識するとともに、教師になりたいという思いが一層強くなった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○特別活動の役割 ○教職への動機づけ

6. おわりに

本稿では、実務家教員が具体的な実践例や学校教育に関する情報を積極的に提供することが、受講者の教職理解にどのような影響を与えるのか検討することを目的として、受講者の振り返りカード等に記載された内容をもとに考察してきた。

筆者自身、学校現場や教育行政等の実務経験があることをもって実務家教員であるとの認識はないが、佐瀬 (2014) の「実践を基調として研究にアプローチ」する実務家教員像や岡村ら (2015) が「実務家教員が自身の経験を語ることをもって『実践的指導力』の育成だとするならば、そこでは『実践的教育学』のエッセンスが取りこぼされてしまう恐れがある」との指摘を真摯に受け止め、学校現場全体を客観的、理論的に見通すことができる力や自らの実践を常に振り返り、研究を通して成長する姿勢など実務家教員に求められている資質を高めながら教員養成の実践と研究に取り組んでいきたい。

参考文献

- 安藤雅之 2014 実務家教員に求められる役割、資質能力 シナプス 2014.5月号 P11～P15 ジアース教育新社
- 岡村美由規・相馬宗胤・伊勢本大・正木遙香 2015 高等教育機関に従事する教師教育者の在り方に関する考察－「実践的指導力」と実務家教員をめぐる議論から－ 広島大学教育学研究科紀要 第三部 第64号 P37～P46
- 菊永俊郎 2014 大学と教育委員会を結ぶ実務家教員の役割 シナプス 2014.5月号 P20～P23 ジアース教育新社
- 教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議 2013 大学院段階の教員養成の改革と充実等について (報告)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/093/houkoku/attach/1340445.htm (参照2018-11-22)
- 迫田孝志 1995 第6学年学級活動実践例 特別活動研究 NO.29 鹿児島県小学校教育研究会特別活動部会 P68～P73
- 佐瀬一生 2014 教員養成において実務家教員ができること シナプス 2014.5月号 P16～P19 ジアース教育新社
- 関谷美佳子, 千葉圭子, 小池高範 2015 教員の職務の実際－実務家教員から教員志望者へのメッセージ 秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門 第70集 P149～P157
- 中央教育審議会 2015 これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申)
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/___icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf
(参照2018-11-22)
- 徳永 保 2014 実務家教員で教員養成はどう変わるか・変わったか シナプス 2014.5月号 P5～P10 ジアース教育新社
- 文部科学省 2017 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別活動編 東山書房